2017年1月19日

論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　倉田　由美子
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　英国在住日本人における精神健康度の季節性変化
論文題目（英文）　The seasonal changes of mental health for the Japanese residents in the United Kingdom

公開審査会
実施年月日・時間　2016年12月5日・13:00-14:00
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	野村　忍	博士（医学）	東京大学	内科学一般（含心身医学）
副査	早稲田大学・教授	根建　金男	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	熊野　宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	森本　豊富	Ph. D.	UCLA	文化人類学・移民研究

論文審査委員会は、倉田由美子氏による博士学位論文「英国在住日本人における精神健康度の季節性変化」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

論文概要書、および本論文(一部を含む)が掲載された主な学術論文・業績目録は別添資料の通りである。公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。その後、約20分間の質疑応答があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　コメント：中間発表会以降、主査及び副査より指摘された問題点について適切に修正がなされており、全体としてかなり改善されて論旨の明確な論文構成となった。プレゼンテーションも、わかりやすくまとめられていた。

1.2　質問：昨今の英国周辺の急激な政情変化を踏まえて、本論文で提案している英国在住

日本人に対する支援として何か提案できることはあるか。

回答：情勢の変化に対応した支援策を考慮する必要がある。その中でも、本研究の成果から、滞在早期の介入と、季節性変化を考慮した支援が必要である。

1.3　質問：ストレッサー尺度の作成について、一部既存の尺度を使用しているが、著作者からの許可はとっているか。

回答：既存尺度の著作者には、卒論時とその後の論文投稿時に連絡して、使用許可をとっている。

1.4　質問：ストレッサーの精神健康度への影響について、日英の季節性の違いの考察を深めてほしい。

回答：英国では夏季、冬季とも「対人関係」が精神健康度に影響しており、日本では影響していないことについて、このストレッサー尺度の「対人関係」は、英国在住者の対人関係を基準としているため、日本における対人ストレスとは異なる可能性があることをもう少し丁寧に考察したい。

1.5　質問：今回の質的研究の成果をふまえて、今後の量的な研究の方向性について、展望として述べてほしい。

回答：研究5の成果を踏まえて、冬季に行動活性化などの介入を行った場合の効果研究を今後進めたい。

1.6　質問：臨床心理として貢献できることは何かという視点が大切である。量的な研究では、個人が埋没してしまうので、例えば「夏目漱石」の事例などをふまえての考察もあってもよいのではないか。

回答：量的な研究で、海外在住ストレッサーの調査、高緯度地域での季節性変化の検討をしたが、質的検討として、英国在住日本人のインタビュー調査を行い、現実的な困難感あるいは対処法について検討を行った。これらをふまえて、個人に対する支援方法の知見が得られたと考える。

1.7　質問：季節性の影響は変えることができないが、どのような支援が有効か。

回答：英国在住者に対して、滞在早期から海外在住ストレッサーや高緯度地域での季節性変化および対処法を含めた心理教育を行うことや相談ネット―ワークを作ることなどが支援策として有効と考える。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 昨今の英国周辺の政情変化について、本論文の成果を踏まえて英国在住日本人に何か提案できることはあるかを加筆してほしい。

2.1.2 研究３のストレッサーの精神健康度への影響について、日英の季節性の違いの考察を深めてほしい。

2.1.3 研究５の成果を踏まえて、今後量的研究を進めるとすれば、どのような展開になるのかを加筆してほしい。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求

を満たしていると判断された。

2.2.1 以下を総合考察に加筆した。

「最後に近年のヨーロッパでの経済の悪化や移民の増大などを巡る情勢の変化や、イギリスのEU離脱など英国在住日本人を取り巻く環境は刻々と変化をしている．英国に長期滞在するための査証取得・更新への制限による滞在困難化や入国制限による日本人長期滞在者数の減少や日本人社会の縮小は今後起こりうる事象であると考える．そういった日本人の滞在環境が変化することで，さらなるストレスの増大や日本人交流や対人的なサポート資源が減少する可能性は十分にありうる．このような問題が生じたとしても，本研究で提案するような滞在早期に，適切な滞在生活を送るための過ごし方や，ストレスへの対処方法は変わらず必要な支援であり，季節性変化を考慮した支援が必要である。」

2.2.2 「対人関係は，日本は夏季も冬季も有意でないが，英国はどちらの季節も有意であった理由」について,研究３の考察に加筆した。

2.2.3総合考察に下記の内容を加筆した。

「量的な研究で、海外在住ストレッサーの調査、高緯度地域での季節性変化の検討をしたが、質的検討として、個別のインタビュー調査を行い、現実的な困難感あるいは対処法について検討を行った。これらをふまえて、個人に対する支援方法の知見が得られたと考える。研究5の成果を踏まえて、冬季に行動活性化などの介入を行った場合の効果研究を今後進めたい。」

3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：

本研究は、高緯度に位置し、日本人長期滞在者が多い英国在住日本人のメンタルヘルスをテーマとしたものである。本研究は、海外在住ストレッサーおよび高緯度地域による季節性変化の精神健康度への影響と、英国在住日本人のストレス対処行動について調査し，彼らに対する心理的支援に必要な視点を明らかにすることを目的とした。本研究の成果は、英国在住日本人に対する支援活動に有益な知見を提供するものである。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：

本研究は、①海外在住ストレッサー尺度の開発（研究１）、②精神健康度の季節性変動（研究２）、③ストレッサーの季節性変化の影響―日英の比較―（研究３）、④英国在住日本人における季節性変化の影響（研究４）、⑤季節性変化とストレスへの対処の仕方（研究５：インタビュー調査）から構成されている。上記の目的を達成するために、英国在住日本人、北欧在住日本人、東南アジア在住日本人および日本在住日本人を対象として、膨大な調査データを収集し、英国在住日本人の精神健康度への海外在住ストレッサーおよび季節性変化の影響を分析したものである。量的研究としての様々な統計的分析方法やインタビュー調査に用いた質的研究法は、本研究の目的を達成するための妥当な研究法であったと判断された。なお、本博士学位論文の内容を構成する研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得ている。（承認番号：2011-177、2015-57）

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：

本研究の成果は、英国在住日本人のストレッサー尺度を開発したこと、海外在住ストレッサーおよび季節性変化の精神健康度への影響を明らかにしたこと、季節性変化とストレスへの対処方法の知見を得たことである。これらの知見は、英国在住日本人のメンタルヘルス向上へ役立つ心理的支援に必要な視点を提供したと考える。特に季節性変化について現地在住者を対象に縦断的に分析した先行研究は殆どなく、本研究は季節性変化の影響や滞在者のストレスを理解するための多くの示唆を提供することができたと考える。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 これまで、海外在住ストレッサーの研究は多数存在するが、英国在住者に特化した研究は少なく、また高緯度による季節性変化に注目した研究はほとんどない。英国では、夏季と冬季の日照時間の差が大きく、精神健康度の季節性変化が大きい。英国在住日本人のメンタルヘルス向上に向けて、海外在住ストレッサーと季節性変化に着目した本研究は独創性が高いと判断した。

3.4.2 本研究では、英国在住日本人を対象として、夏季と冬季の縦断的調査を行っており、季節性変化の影響を評価するための貴重な知見を提供している。

3.4.3 英国在住日本人を対象として、インタビュー調査を行い、海外在住ストレッサーおよび季節性変化に対する対処法について質的研究を行っている。これらの知見は、英国在住日本人に対する心理的支援を行う際の重要な視点を提供している。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 近年、海外在住日本人が増加し、同時にメンタルヘルス不調で困難を抱える人も増加している。その要因として、海外在住ストレッサーに加えて、高緯度地域では日照時間の差による季節性変化の影響も強い。本研究は、日本人在住者の多い英国を対象に、海外在住ストレッサーと季節性変化の精神健康度に及ぼす影響という視点から、縦断的調査を含めた膨大なデータ収集を行い分析したもので、学術的意義は高いと判断する。

3.5.2 本研究の成果は、英国在住日本人のメンタルヘルス向上に向けて、海外在住ストレッサーや季節性変化の精神健康度への影響やその対処法について滞在早期に心理教育を行う際の重要な知見を提供しており、社会的意義が高いと判断する。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 本論文は、心身医学、臨床心理学、疫学、公衆衛生学、文化人類学にまたがる学際的な研究であり、英国在住日本人のメンタルヘルス向上に向けての多くの知見を提供したという点で意義がある。個人要因だけでなく、環境との相互作用という視点は、人間科学の理念に基づいたものであり、それを具現化したという点で評価に値する。

3.6.2 グローバリゼーションが加速化する現代社会において、海外在住日本人を支援するシステムづくりは喫緊の課題であり、本研究の成果は多大なる社会貢献をするものと考える。

4　本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

1）Kurata Y., Nomura S.： 2012 Seasonal Mood and Behavioral Changes for Japanese Residents in the United Kingdom, Psychology, 3(Special Issue), 848-855.
〔博士学位論文の研究２と対応〕

２）Kurata Y., Nomura S.：2014 Development of the Stressor Scale for Japanese Overseas Residents (UK Version). Journal of International Health, 29(1), 1-9.
〔博士学位論文の研究１と対応〕

３）Kurata Y., Izawa S., Nomura S.：2016 Seasonality in mood and behaviours of Japanese residents in high-latitude regions: transnational cross-sectional study, BioPsychoSocial Medicine, 10:33.　DOI: 10.1186/s13030-016-0084-2.
〔博士学位論文の研究２、４と対応〕

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以　上